フェヒネルは其晩年猶ほ研究著述には多忙であつたけれども、別にこれぞといふ出來事はなくして、幸福なる生涯を送つた。彼は彼と同氣同質の妻と和合し、親友と交際し、外國の學者と交通して居た。千八百六十年以後は、殆んど毎年休暇中に其妻と保養的旅行を爲し、時には朋友或は親戚が之に伴つた。彼は獨逸の諸方を遊歷した。瑞西、南墺の山地へも旅行した。千八百七十四年には、羅馬へも行つた。然し彼は旅行に於て、人文より地文を喜んで居た。

彼が眼はあの病氣後、ひと先づ快癒したが、完全でなかつたらしい。晩年内障眼を累ひ、千八百七十三年及び同四年施術を受け、後また一度施術を受けた。故に殊に晩年には充分眼を大事にせなければならなかつた。

彼が朋友が次第に逝去したことは、彼が傷神の出來事であつた。ヘルマン・ヴィセは千八百六十六年に死し、ドクトル・ヘルテルは同七十五年に、エーベルは同七十八年に、殊に彼が交際頻繁であつたツェルネルは同八十二年に死んだ。幸に彼が妻は彼より長生した。

齡進むに從ひ、旅行は中止せなければならなかつたが、彼が精神は毫も衰へない。彼は彼が研究特に精神物理學に從事して居た。又た「集合測定學」(Kollektivmasslehre)なる科學的大著述に從事して居た。然し彼が生存中は誰人も之を知らなかつた。不幸にして之は完成に至らなかつた。

フェヒネルは晩年、その周圍の人々より、色々尊敬愛慕の意を表せられた。千八百八十一年には、彼が八十の誕生を祝され、同八十三年には、金婚式を祝はれ、翌四年十月三日には、教授就職の五十年の祝賀が擧行せられた。彼はまたライプチッヒの名譽市民に推擧せられた。彼が生地に於ては、彼に對する祝賀會が擧行せられて、彼が知らざる牧師は、彼が生れた時刻に寺鐘を鳴らさせたといふ。此等は何れもフェヒネルに一方ならぬ喜悅を與へた。

千八百八十七年十一月六日フェヒネル平常の如く勉強したが、夜九時突然卒中に罹つた。やがて醒めたけれども、次第に弱つて、同月十八日夜半終に永眠した。

フェヒネルは元來謙遜な靜な學者肌の人物であつて、其生涯は純粹なる學者の生活であつた。質朴で、威張らず、外形の立派を好まず、自分の精神を樂んで分に安んずるといふ風であつた。色々の點に於て殆んど小供の如き素朴を有して居た。然れども彼の鋭利なる觀察力を以て、日進の近代生活の各方面を了解することが出來た。慈愛に富み、眞情に深かつた。同時に冷靜なる判斷力を有して居た。想像を逞うすることを好むが、同時に卓絶なる論理的理性、批評的能力を備へて居た。意見の交換、議論を上下するを好んで居たが、また和合的の性質を有して居た。故に凡ての人から尊敬せられ、且つ愛慕されて居た。

彼が居は、ライプチッヒ市の東部に在るブルーメンガッセ

にあつて、極めて質朴な小屋であつた。彼が裝飾なき書齋には、塗の脱げた粗末な四角形の机があつた。書齋と其次の納戸見たやうな小室のところには、數臺の粗末な本棚がある。本棚には本は極て少ない、只だ草稿が堆積せられてあるばかりである。彼は壯時までは、色々の方面の書籍を驚くべく博く讀んだけれども、長く眼を累つてからは、讀書は殆んど全く禁じてしまつた。只だ僅に他人より讀んで貰つたけれども、實に不滿足であつた。故に何んでも自分の古き記憶を辿るか、或は自分自身で發明せなければならなかつた。彼が一番多く用ゐた書は對數表であつて、毎時も彼が机上に横はつて居た。彼が重に讀んで居たものは、彼自身の草稿である。彼は最初は四折の紙に他人が讀むことの出來ぬやうな字體にて其思想を記す。次に之を纒めて統一連絡ある文章に綴り、最後に二折の紙に清書する。意に滿たぬことがあれば、猶ほ再三推敲を施した。彼は自ら讀み易からんが爲めに大字を書いた。然し其字體は他人には讀み易からず、活字組は往々頗る閉口したとのことである。彼は書取らすことは出來なかつた。

彼は斯の如く周密な記者であつたが、其科學的著述の中の計算にも非常に念を入れた。彼が著述中の計算は非常に夥多であるけれども、彼は一々必ず數回繰返し、其結果の正確を期せなければ承知せなかつた。

彼が時間は殆んど全く沈思と書くことゝに分たれて居た。

彼は彼が慰として、彼が夫人と日々散歩をして居たが、散歩中何か考が起ることがあれば、直に歸つて書齋に入り、之を記した。然し他人が彼を訪問しても、決して勉強を妨げられたやうな顔を見せなかつた。彼は未決の問題に關して他人と議論を交ゆることを好んで居た。而して其當座だけでなく、後久しく自分自身で該問題を考へて居たことが屢々あつた。故に彼は談論の際思付かずして、後に思付いたことがあれば、之を書きつけて議論の敵手であつた人に送り、以て長く通信にて意見を闘はしたことがあつた。但し彼が談論の問題は經驗的の問題に限られ、彼が著述にてあの通り熱心に普及を計つた哲學的宗教的の確信に關しては、殆んど全く談論したことはなかつた。而して彼が從事中の事業に關しては、決して他人に知らせなかつた。一般に人は其完成の後ち初て之を知つたのであつた。其著しき例は、彼が未定稿の「集合測定學」である。此學の計畫は彼が廿年間も懷抱して居り、十年間も此著述に從事して居つたけれども、彼が妻も、朋友同僚も、此著述のことを少しも知らなかつた。彼が死後、彼が未亡人の乞に由り、ヴントが彼が書類を整頓した時、該著述を發見して大に驚いた。序に、此著述は、撤遜王立科學會の依囑に依り、ジー・エフ・リップスといふ人が之を補修して、出版されて居る。

フェヒネルの哲學

一　緒論

上述彼が生活の一瞥に依つて、讀者は必ずフェヒネルが事實經驗を尙ぶ熱心なる科學者であつて、經驗を超越した言はゞ架空的の哲學には極力反對した學者であつたことを了するであらう。然し讀者は「死後の生活」を讀み、フェヒネルが經驗を超越したる來世の生活を詳かに語るを見て、其矛盾の甚だしきを怪まざるを得ないであらう。實にフェヒネルが哲學の精髄を一言以て蔽へば、人間動物ばかりが靈を有するに非ずして、また、植物も地球も、他の遊星も恒星も、何れも靈を有して

居り、其上に神が宇宙靈として存ずるといふのである。是れ寧ろ經驗を超越した架空式の哲學見たやうではないか、想像が作り出した一種の詩ではあるまいか。自然萬物に靈ありとの敎は、古來東西の思想史上に絶えず現はれた說ではないか、フェヒネルは單に其思想を蹈襲布演したに過ぎないではないか。然し吾人は此に思出す、フェヒネルは熱心なる科學研究者であつた、經驗事實を顧慮せない學說は、極力之を排斥したことを知つて居る。吾人は此に依りて必ずしも彼の哲學が純粹なる詩的想像、事實經驗を無視する、單に思想が紬き出した哲學でなからうことを推せざるを得ない。而して此推察は審に彼が說ぐ所を見れば、果して誤たないのであつて、彼が哲學は

決して架空的のものでない、單に詩的創造でもない。吾人は之を了解せんには、彼が哲學上の思想を相連絡して考へ、又た彼が哲學の科學的基礎、少くとも彼が哲學を、科學上の問題と關連して考へねばならぬ。又た萬有皆靈ありとの彼が世界觀は、其大抵に於て古き神話的思想と一致して居り、又た古來屢々世界觀の史上に現はれた說と一致して居る所があるけれども、彼が說は他より承けたものでなくして、全く彼が獨創發明した所である。彼が幼少當時の自然哲學、殊にオーケンの自然哲學に一時感化されしは前に述べた所である。然し彼はやがて其束縛を脫し、却てドクトル・ミーゼスの假名で自然哲學を譏つた。彼が哲學は古來の說にも、又た當時の自然哲學にも、負ふ所は極めて尠ないのである。

但し細かな點、一々の思想に於ては、オーケンの感化全く消失せなかつたかも知れぬ。ヴントは其フェヒネル講演の六十三四頁にフェヒネルの思想に類似したオーケンの句を集めて居る。

凡そ人の事業は、其人の個人性を以て押印せられてある、換言せば其人の性格の發表である。フェヒネルが哲學を解するには、先づ彼が性質傾向才能、一言せば彼が個人性を考へんければならぬ。先づ第一に彼は最上の科學的才能を有して居た。彼は精確周密を好み、秩序整頓を喜んだ。故に彼は自然界の現象に規則一致あるに非常の興味を有ち、複雜纏綿せる事情に分析を施し、之を簡單なる關係に解かんことを欲した。而して彼は之を爲すに最上の才能を有して居た。彼は數學の造詣深

く、彼が研究分解の補助として自由に之を使まわして居た。彼は實驗方法に於て稀有なる發明力を有し、嚴密を欲する彼が獨特なる努力が之に附隨して居た。彼は他の學者が一定の目的なく行つて居つた實驗を、目的原理よりして之を爲し、以て一層完全なる方式を發展さした。彼が電氣學の研究及び精神物理學のそれは、之が幾多の立派なる證である。

次に彼が特性は、感官的直觀世界(普通の言葉で言へば吾人が五官にて接する世界)に對する彼が熱心なる興味である。彼が未だ眼疾に罹からなかつた以前に有して居た個物の觀察、他人が容易に看過する意外偶然の事物の觀察に於て、彼が感覺の鋭敏であつたのは、一は此熱心なる興味にも依るのであ

る。同時に彼が美的感覺は、彼をして殊に光線色彩の世界を喜ばしめ、從て繪畫等の鑑賞家たらしめた。此特性は彼をして、彼が早時の科學的研究より遠ざかれる、而して一見無規則なるが爲め一般に研究が等閑にされて居た現象に、早くより眼を注がしめた。即ち主觀的色彩の現象である。彼は之に就ては、固より他人が毫も眼に附かなかつたものを發見したのでなかつたが、此現象の混沌の中に秩序規則を引入れたことが、彼が活躍たる觀察の才能と、嚴密なる分解との結合の致す所である。

以上の二特性は科學者に必要であり、又た哲學者にも必要であるが、只だ此丈の特性にては、到底フェヒネルが「死後の生

活」及びッェンドアフェスタの如き著述は成立することは出來ない。彼は則ち第三の特性を有して居た。此特性は元と彼が性來のものではあるが、彼が境遇運命よりして一層開發されたものである。是れ即ち彼が宗教的感情である。此感情は彼が全存在を滿たし、彼が科學的研究に熱中せし時にも、此情は蓋し折り〳〵涌出したことがあつたらしい。「死後の生活」は寧ろ彼が科學研究時代の作であるが、第一版の序文に依れば、其中の思想は餘程以前から有つて居つたらしい。然しあの大病後此情は益々勢力を逞うした。彼が自然科學者より哲學者となつたのは、實に此宗教心があつたからである。然し彼が自然科學者でなかつたら、彼が哲學は其特色を失うたに相違ない。

此等の科學者としての特性、宗教的思想家としての特性、互に相薫化し、以て哲學者フェヒネルを作つたのであるけれども、哲學者フェヒネルを完全に了解せんとするには、モ一ッ重大なる要素がある。此要素は彼が個人性彼が人物を構成する要素の最も著しきものである。即ち彼が絶對的に僻見のなきことと、及び自說を作るに極めて大膽であり毫も顧慮する所なきことゝである。此特徴は彼が自然科學の研究にも、彼が宗教的教會的態度にも感化を及ぼし、就中彼が哲學的努力に之が發揮されて居る。彼は如何なる說でも、如何に廣く行はれ一般に認められた說でも、如何にオーソリチと思はれた說でも、決して直に其儘之を信じたことはない。否な、說が廣く認められ

オーソリチと思はるれば思はるゝほど、彼は疑の眼を以て之を見た。彼はかう確信して居た、傳來の說、オーソリチの信仰に慣れるといふことは、事物の偏頗なき考察に對する最も危險な、最も多く世に廣がつて居る障碍物である。さればとて、彼は單に奇矯嶄新を喜ぶものでもない。大膽なる假定、在來の信仰に反對する假設、必ずしも彼を魅するものでもない。彼は流行の說も新奇の說も、之を一樣に見て、一樣に彼が有する理由を以て、之を檢査反駁せんと力めて居る。彼は嘗て言つたことがある、予は物を信ずるにも用心深いが、信ぜぬにも用心深い」。彼が討論の嗜好も之より出たのであつて、彼は決して、何んでも單に議論其物を好み、何事でも疑ひ、敵手の理由が正當と知りながら、猶ほ自說に固執する如き討論家ではなかつた。彼は敵手の理由が正當であると見れば、全く其說に從ふに躊躇せなかつた。彼が議論には個人的忿怒の如きは毫も雜らなかつた、何處までも厚意が現はれて居たとの事である。只だ一つ多少彼を憤慨せしめたことは、自己の、確信より出でずしてドグマに固執することとである。宗教的ドグマに對しても、科學的ドグマに對しても同樣であつた。彼は深く確信して自ら基督教徒と稱して居たけれども、教會のドグマは毫も彼が信仰に與からずと自白して居た。

吾人はフェヒネルが哲學を解するに、何時も此等の特質を記憶して居らなければならぬ。又たフェヒネルが有つて居た

公平を有つて居なければならぬ。僻見を有して居ては到底フェヒネルの哲學を公平に評價することは出來ない。さてフェヒネルは彼が哲學的考察には、彼が自然科學に用ゐた方式の外、決して他の手段方法を用ゐないと稱して居る。苟も經驗を基とし、之よりして世界觀を得んとする以上は、此方式に依るより外に方法がないと彼は言つて居る。而して此方法手段は即ち歸納と比論とである。歸納とは個々の事實より一般の法則を作り。比論とは吾人が知つて居る事物より、吾人が知らざる他の事物を判斷する方法である。フェヒネル以爲らく、個々の科學のみならず、普通の世界觀も、かゝる歸納と比論とに依つて出來たものである。此普通の世界觀は科學社會に於ては傳來のものであつて、一層範圍の廣き敎育ある社會に一般に廣く流行して居るのである。フェヒネルは此世界觀を前に述べた通り「闇夜見」と稱して居る。その意は、色彩音響感覺感情の此世界を、從て自然界の觀照及び同胞との交通に於て吾人に人生の幸福を與ふる萬事を、此世界觀は一時の主觀的經驗として居る、繰返し來る幻影と稱して居る。世界は其自身に不可貫の闇黑寂靜に鎖されたる混沌界として居る。世界には振動する分子、毫も休止する所なき單調の運動の外何物も無い、而して此混沌の中には只だ個々の光れる響ける點があるのみであり、暫時現はれて再び周圍の闇黑に沒する感覺なるもののみがあると稱して居る。フェヒネル以爲らく、是れ自然科學

者の世界觀であつて、神學も何等の抵抗なくして之に降り、敢て一語の反駁を試むることもない。斯の如くんば神の麗はしき世界は地獄に變じ、人の慰藉たる赫たる來世の見込は不確となる。否な、斯の如き闇黑の現世より如何に光明の來世が出來得べきか、解することが出來なからう。

フェヒネル以爲く、此闇夜見は極て不滿足なものである。然れども是れ決して科學的知識の結果ではない。實は科學が其歸納と比論とを中途に止め、以て世界の不完全なる像を成立さしたに由るのである。科學が建てた此不完全なる像は、宇宙一部の說明には好都合かも知れないけれども、此一部の說明を以て事物の全實在に適用すれば謬見となるのである。フェヒネルは此闇夜見の起る所を以て、重に該見が二問題を全然解釋することが出來ないに歸して居る。此二問題とは、哲學上の最も幽奥な、最も困難な問題であつて、生活と意識との問題である。

二　生活の起原

先づ第一に生活は如何にして起るか。普通の說に依れば、或る未知の事情の下に、自然界の無機物から有機物が生れるとしてある。然らば生きた有機物は、死んだ生活なき自然の產物であるのである。是を以て有らゆる方法を用ゐて、無機物より有機物を作らんと試みて見た。然れども、無効であつた。是に於

てか說を爲して曰く、太古には地上に有機物を生ずる條件が存在し居たけれども、今は之が存在せない、また人工的に此條件を作ることも出來ない、然し古に遡り考へ見ても、別に古代とて有機物の存在に今日より好都合の事情があつたやうに思はれぬ。生物が無生物より生ずるとは、畢竟確實なる根據なきドグマである。

之に反して有機物は、その物質が新陳代謝し、其が頽敗して無機物が生ずるといふことは、吾人が常に經驗する事實である。而して學者之を顧ない。此經驗的事實よりして、却て普通の說の反對が眞理らしく思はる。即ち生物は無生物より生ずるにあらずして、却て無生物が生物より生ずるといふのが眞理

ではあるまいか。

無生物は生物より生ずるも、生物は無生物より生ぜずとせば、之が結論として自然に、此地球上の凡ての生物を嘗て產じた生物は、地球其物であるとせざるを得ない。地球は詩的譬喩的の意味でなくして、實際の意味に於て吾人が母であるのである。人は石ころから生れたと信ずる野蠻人がある。吾人は氣の毒そうに彼等を笑ふ。然れども生物が無生物から生ずると思つて居る吾人は、之に何の異る所があらうか。吾人は、動物も植物も人も、地球上の全生物は、死んだ石ころの上に偶然降りた沈澱物であると見るてはないか。吾人は幼時より學校に於て地球は球だと敎へられ、山や川や海や生物が其上に畫かれ

てある球のやうに地球を心得るに至つた。フェヒネルは此考の愚なことを科學者の夢に譬へて明瞭ならしめて居る。その夢は、科學者清き水の岸に立つて居る。水中に正反對の兩端のみが雪白で全體が綠である球が浮んで居る。彼以爲らく、是れ何んであらう、恐くは非常に大きな滴蟲類であらう、捕へて以て此新しき種の記載を爲し、以て功名手柄にせんと。乃ち之を捉へて來て、檢微鏡下に置き、之を檢ずる。緣飾緣毛のやうな物がある。然るに一層强度の鏡の下で見た處が、此滴蟲類と思つたものは、細胞が繫がつて居ないで、意外に其構成要素として、其表面に樹木、花、羊、馬、犬、人等が蠢動して居た。而して突然、そこに動いて居る一點は自分であるといふことが分つた。科學者は

豁然として悟つた、以爲らく、凡て他の植物や動物と同しく自分が其一部たる此球は、生物に相違ないと。彼は之を他の科學者に語つた、彼等は勿論彼を笑つた。然し何れが正しいであらうか。言はずして明かである。

然るに地球が活物であるといふことに就き、最も重大な反對は、地球は石ころより成つて、吾人が生活作用に必要と見る形態學的、化學的要素、即ち細胞、組織、機關、蛋白質等を有して居ないことである。然しながら地球は既に有機物を產じて居る以上は、他に有機的產出を示すの必要がないではないか。吾人が地球を有機的と名づくるのは、地球を構成する他の個々の生物を有機的といふより意味が少しく異ならなければなら

ぬ。吾人は地球を高等の個體と見なければならぬ。此高等の種類に屬する個體は、此地球と同等なる他の遊星である。

斯く見來れば、生物と無生物との差別は、構造上、或は物質上の差別でなくして、諸種の事物上に現はるゝ現象が生ずる運動作用の特性に之を求めなければならぬ。有機物も無機物も、皆な其運動は二大原則に從ふものである。二大原則とは、一は因果の原理、他は目的の原理である。前者は廣く認められて居るけれども、後者は看過せられ、或は充分に了解されて居ない。因果の原理は、同一の事情の下には、常に同一の結果が生ずるといふのである。此原理は生物無生物、全自然界を支配し、しかも精神界をも支配するのである。然し此原理丈けでは、個々の現象の特質、從てまた無機有機の差別を定むることは出來ない。目的の原理は、因果律の如く、同じく自然現象の作用運動の一般の考察より生ずるものである。而して因果の原理は、事物に一定の法則があるといふことを明にしたものであるが、目的の原理は其法則の方向を示すものである。故に因果目的の兩原理は、相矛盾するものでなくして、互に相補ふものである。

目的原理は、フェヒネルまた「恒常傾向の原理」(Princip der Tendenz zur Stabilität)とも言つて居る。何でも他と區別の出來る相關的に獨立と見ることの出來る系統は、また其中の相關的に獨立した部分も一樣に、以前に自分が有つて居た狀態に早晩還つて來る。例へば遊星は太陽の周圍に回轉し、常に同一

の狀態に還つて來る。又た有機體に於ては、同一の生活作用が、一定時に同一の個體中に起り、或は子孫生殖の變化中に起る。但し此原理の有効は實際に於て絶對的でない、常に近似的である。例へば分子の一定の振動は、溫度の變ずるに從て變ずる。遊星の運動も阻碍を受け、從て「恒常」より遠ざかる。有機物の生活作用は、漸次に其平均の狀態を失ひて「恒常」より遠ざかり、最後に全く其平均を失つてしまう。然し系統が大なればなるほど、周圍から制肘せらるゝことが少なく、從て同一の狀態即ち恒常に還ることが、絶對的同一に接近することが多い。故に宇宙全體には、絶對的の意味に於て恒常原理が有効でなければならぬ。

恒常傾向を分ちて單純と複合との二種にすることが出來る。單純恒常は、凡て無機的分子、例へば結晶體の分子の如きものに現はれる。複合恒常は、凡て有機體及び之を構成する要素が好例を示して居る。即ち各細胞は其物質の新陳代謝に依つて恒常の狀態に止り、細胞の集結より成る全有機體も同樣である。又た有機體の生殖の連續に於ても、死生の變化に依つて、同一なる有機的形が常に新にせられ、以て恒常の狀態を維持するのである。

然らば宇宙の諸系統は、此二種の恒常の何れに屬するものであるか。吾人の地球は太陽の周圍を回轉し、同一の狀態に還るを以て、無機體の完全なる恒常に比すべきものである。然れ

ども、其作用の複雜なる點に於ては、一定期に出沒する生物に類似して居る。丁度吾人の身體が、他と差別ある一系統であり、中に諸の力や目的があつて之を支配して居るやうに、地球も獨立したる他の地球に相對し、其中に力や目的を有して居る一系統である。地上の作用も身體の作用の如く、或は長く或は短く、時間的に一定期に、空間的に一定距離に規則正しく分割されて居る。宇宙的系統は、此分割此還元恒常が、規則正しく行はれて居るからして、有機的作用の最も完全なるものと見ることが出來る。此完全なることは、宇宙系統には、其一定時に起る作用が錯綜して居ると同時に、吾人が地球の無機體に現はれるやうな殆んど完全なる恒常があるからである。此恒常の完全が、宇宙的系統の有機的生活と個々の有機體及び其構成要素の生活と別るゝ以所である。フェヒネルは宇宙的系統の生活を宇宙有機的生活と名つけ、各有機的生活を分子有機的生活と名つけて居る。

さて地球上の生物が地球其物より生ずると同じ理法で、分子有機的作用は宇宙有機的作用より發することゝ見なければならぬ。而して一般に恒常現象は、恒常のより少なきものより、恒常のより多きものに移り、從て有機物は無機物に移るといふのが其傾向であるからして、分子有機的作用が宇宙有機的作用より成立すると同時に、無機的物質も成つたと見なければならぬ。地球は單に萬物を載するが故のみにあらずして、

本當の意味にて萬物の母であるのである。然し地球は、吾人が太陽系なる大なる宇宙有機的系統より見れば、一の個體に過ぎぬのである。太陽系なる大なる有機體は、凡を統一する宇宙全體より見れば、また一の個體に過ぎぬのである。

三　意識の成立

意識の起原に就ても普通の說は、生活の起原に就ての如く誤つて居る。俗見は則ち意識を以て、無意識より起るとなし、而して未だ之が證明を與へない。此見解の誤謬缺陷は、卑近なる外見上の比論に依つて說を立てるからである。世人、動物に精神意識があると思つて居るのは、動物が吾人々類と類似の神經系統を有して居るからである。然し如何にして神經系統が意識を有するに至つたかは知らない。また神經系統のみが意識を有して、何ぜ他の物質の結合が之を有せぬかを審にせない。動物が感覺を有するには神經が必要であるから、植物も感覺を有するには神經を有して居らなければならぬといふのは、丁度ヴイオリンは音を出すに絃を要するから、笛も音を出すには絃が必要であるといふのと同樣である。是れ意識が生ずる眞正の條件を究めずして、全く種類の異なつたものに對して有効なる條件を、他の種類に持出して證明せんとするのである。植物に感覺ありとせば、是れ神經に依つて出來たのでない。誰も神經がなければ一般に如何なる感覺もないと證明し

た人はない。原生動物には、神經がないけれども、機能があるからして、感覺があると思はれて居るではないか。勿論植物の機能は、多くの點に於て、最單純なる動物のそれとは種類を異にして居る。然し感覺は單に動物的機能に依つて現はるゝとは、誰も斷言することは出來ない。且つ地球、遊星等も、之に意識あるには、腦髓や神經を有せぬければならぬといふのは、部分より全體を推する不正の推論法である。地球に屬して居る人間動物が腦を有して居る以上は、地球は既に要求せられた一種の意識の機關の多を有して居るのである。地球は全體として凡ての人類動物を包含して居るから、此等の動物の機關、或は之に比すべき意識の地體（メデストフート）が、再び此全體に繰返されぬと見るが當然であらう。

意識の起原に關する俗說はかく不都合なる外部的の比論に依るのであるが、意識現象の變化の原因に付ても同樣である。吾人が寫象（普通の言葉で言へば念想のやうなもの）は忽ちにして來り忽ちにして去る。而して一定時に於ては吾人が意識の內容は極めて狹き者である。即ち其內容は或は既に久しき過去の知覺の回想より成るかと思へば、或は直に少し前にあつた直接印象——此印象は其時注意を向けなかつたから暫時無意識であるが、やがて意識に現はるゝ印象の回想より成ることもある。然らば嘗て意識に在つて後ち意識より消失したものが、モ一度意識に現はるゝ（寫象）は何處より來るであらうか。又た意識より

消失するものは何處に行くであらうか。フェヒネルは之に答を與へて曰く、個々の生活が包含的の大なる生活作用の分枝である如く、個々の意識は、それが個人に於ける最初の成立であらうが、或は其中の個々の寫象の成立であらうが論なく、何れも一層大なる意識に基き、此大意識の中に小意識各寫象は沈み、又た其よりして現はるゝのである。地球上に於ける個々の意識の基ける大意識は、地球の全生活と關係ある者としか思へない。吾人が意識の最初の成立は、睡眠からの覺醒に類して居る。人は其生るゝ際に、曖昧なる回想と見るべき多くの精神的能力の蓄を世界に持て來るのである。睡眠から覺醒する時には、或る意味に於ては個々の意識の成立が繰返さるゝと言ても宜い。同樣に寫象の來去、從て注意の變化も、睡眠覺醒の變化が再び個々の意識に現はれる作用である。

凡て此等の內部的經驗は、譬へば意識の閾といふべきものに從て排列する。此閾の上に吾人が覺醒時の總意識がある。丁度波に譬うれば總意識は大波である。此大波の上に變化する小波がある。此小波が即ち意識の特別の內容たる個々の感覺寫象である。此意識が上に現はるゝに越える閾を主閾と名け、總意識の上に現はるゝ個々の感覺寫象が越ゆるのを上閾と名づくる。さて主閾も上閾も共に意識と無意識との境界を表はすのでなくして、より包含的の意識と、より制限的なる意識、即ち大小意識の境界を表はすのである。意識は皆閾を有して

居る。吾人の意識は勿論、一層大なる包含的の意識も闕を有するであらうから、個人の意識の成立は、大意識が闕の上に現はれた作用と見るべきである。地球の意識は、凡て地球上に生活するものの意識の統一を包含すること、丁度吾人が意識が時々刻々に出沒する經驗念想を包含する如くである。又た地球の總意識は、地球自身及び其上の動物の歴史を包含する記憶全躰を支配すること、丁度吾人が意識が、個人生活の全躰を回顧し得る如くである。然し地球自身は、太陽系の宇宙有機的の一個躰であり、而して又た太陽系其物も宇宙に對しては一個躰であるからして、地球自身は段々と登り行く意識の層の中の一個躰である。此意識の層の最頂上は、凡を包含する宇宙の總意識即ち神的意識である。

此神的意識は最下層より最上層に至るまでの凡ての意識を自己の經驗として包含して居る。此神的意識にも闕の原理が應用せられて居ると見るべきである。闕の下にある劣等の意識は發展再生して、闕上の高等の意識となるからして、後者は前者の有する凡を包含して居るのである。かくてフェヒネルは進化の思想を神的意識にも適用せんとして居る。此進化は如何にして居るかといふに、神的意識は最初よりして因果目的の宇宙的大原則に從へる宇宙の計畫を有して居る。此計畫の外部的實行は、宇宙の出來事の進行である。神は自分の作物の目論見を以て居る藝術家の如きものである。此意味に於

て神的意識は人間の意識の如く發展進化するものである。只だ神に於ては最初より統一的に計畫が充滿し、法則に從ふ丈である。故に神は、丁度一個の人間が其自身生涯の運命の産物である如く、神自身の自己經驗の産物である。而して其自己經驗は同時に宇宙の經驗である。此思想に從へば人間も神の事業の共同者遂行者と見ることが出來る。且つ世界の禍殃罪惡は神の根本的性質の與らざる所ではあるが、造化の完全、善や美の創造に必要なる宇宙秩序の一要素と見ることを得るのである。故に宗教的のフェヒネルは大に此思想を喜んで居たやうである。

四　不死說

生活と意識とは決して成立したものでなくして、最初より存在する宇宙の根本的活動である。而して兩者は實際に於て同一出來事の異なりたる發表方面である。譬へば、圓は、之をその中心より見ると、圓外の一點より見ると、相異るやうであるけれども、同一の圓である。丁度生活の作用も、意識の作用も、同一の身躰精神的出來事である。外部より見れば分れて萬物となり、內部より見れば結んで意識の統一となる。兩者互に相補充する。然し共に全實在を包含するのである。世界は身躰精神的存在である。從て精神は腦の一點に座を有する、廣がつてな

い特別の存在ではない。又た凡ての動物は精神を有して居る。尤も精神生活は凡ての機關の共同作用に依るのである。而して個々の意識現象が直接に關係ある運動を、フェヒネルは精神物理的運動と名づけて居る。生活や意識が根原的である如く、精神物理的運動も根原的であつて決して成立したものでない。宇宙有機的作用は皆な精神物理的運動である。宇宙有機的作用が分子有機的に分化して、個々の精神物理的運動が生じ、此運動は各個の意識の基礎たるのである。凡て個々の意識の作用は、それ〳〵特別の精神物理運動に結合して居る。寫象が記憶象として新に現はれ出づるのは、(通俗に言へば過去の事を想出すといふことは)是が個々の意識の閾の下に、其が屬して居る總意識の中に、實際の寫象として存在するからである。丁度之と同樣に寫象に伴ふ運動も繰返し現はるゝことが出來る。是れその運動が一度成立せば、決して滅することなく、只だ一時推しのけらるゝばかりであるのである。精神物理的運動が此の如く無窮に續くのは、譬へて言へば、水の表面に波があつて、此波が他の波と會せば、見たところでは消失してしまうけれども、實際に於て其運動は繼續するのと同理である。

此波の譬よりして疑問が起る。精神物理的運動は、異なつたものに變じてしまつて、同一のものが現はれないではなからうか。從て他の疑問が起る。生活が終ると、吾人が意識の繼續はどうなるであらうか。

フェヒネルは精神物理的運動の考察よりは、此疑問を解くことが出來ぬと自白して居る。該運動は不明であつて、物理的分解を施し、以て其の行衛を辿ることは出來ぬ。然し該運動の精神的の方面を觀察することが出來る。是よりして精神的方面に對する物理的方面も觀察することが出來る。人の身體は物質の新陳代謝によりて絶えず新にせられて居り、遂には前の物質の一分子も殘らぬといふに至つても、精神は依然として繼續し、老人が幼少のことを回顧することが出來る。是れ一度成立した精神物理的運動は、絶えず新になりつゝある肉體の要素に移るからである。人間の意識が人の長き全生涯を越えて廣がり、其活動の永久に繼續することの否定すべからざる以所は、則ち是に在るのである。

斯の如く吾人が精神的經驗及び精神物理的地體（スプストラート）の繼續は、一定の固定した物體に結合されて居らぬ。同樣にまた此繼續は、吾人が身體にのみ結合さると見るべき理由もない。死體は感覺寫象の成立に不都合であつて、精神物理的運動が出來ない。然れば該運動は如何にかして、吾人が周圍の世界に繼續せざるの理があらうか。意識の閾の理を考うれば、之が可能を許さねばならぬ。閾以上の吾人個々の意識は、精神物理的運動を有する體が亡ぶれば、閾以下の包含的意識に入ると見なければならぬ。

さて個人の精神の經驗は、此經驗が精神内に永續せざれば、

意識では無い。經驗が留り保存されればこそ意識があるのである。而して此經驗の中最も重大なるものは個人性の意識である。此重要なる個人性の意識即ち自己意識が、包含的の大意識の中に沒滅してしまうとは、フェヒネルより見れば、考へ得べからざることである。相當に發達した個々の意識は、皆な此大意識の經驗の一部であるのである。フェヒネルは吾人の意識は、此大意識と結合して、精神が窮屈なる肉體と結合して生ずる制限を脱却するものと考へて居る。未來生活は、彼に於ては、實に此地上に於ける生活である。人間は三度此世界に生る。第一世は母の胎内に在る睡眠の不完全なる生活である。第二世は睡眠と覺醒と相半ばせる、より高尚なる生活である。第三世は同じく地上に在る永久に覺醒したる一層高尚の生活である。此第三の生活は、天の彼方にあるのでもなく、此方の地下にあるのでもなくして、地球上吾人の間に在るのである。死者は吾人の中に生活して居るのである。吾人は吾人が肉體に制限せられて居るからして、只だ思想記憶に於て死者と交通して居る。然し死者は明亮の意識を以て吾人が周圍、吾人が中に生活して居る。吾人が思想の多くは、彼等が吾人が精神生活に直接に干與するに依りて起るのである。而して吾人は吾人が未來の生活の條件を自ら此世にて作成しつゝあるのである。猶ほ其他詳細は「死後の生活」に述べてある通りである。

然れば現世も來世も、唯一の永久に存在する生活に歸する

のであつて、其生活の場は此地球上である。吾人は地球なる大意識の生活に與り、而して地球は吾人の爲めには、凡てを包含する神的存在に對して媒介の地位に立つて居る。地球は光り鳴り、見、聽くことの出來る高尚なる活物意識である。此見解が即ち彼の所謂「白晝見」であつて、光る鳴る自然を以て只だ一時的の幻影と見る科學の「闇夜見」に對して居る。フェヒネルは此白日見が科學の敎ゆる結果と一致するのみならず、吾人が經驗知識の全體と違ふことなくして、來世の謎を解き得たりと信じて居る。勿論闇夜見の證明すること能はざる如くに、白日見も證明することは困難であるけれども、知識の此缺陷を補はんが爲め、一度信仰の助力を乞はゞ、白日見はより多く慰藉を與ふる信仰たること疑を容れぬ。他人はいざ知らず、彼自身は此世界觀の確乎たる信仰が、彼に福祉の情を滿たし、しかも彼が經過した有らゆる困難に際しても、彼をして最も幸福なる人なるの感を抱かしめた。彼は彼が大病に就て言て居る、「予が生涯の最も暗黑なる最も希望少き時が、「死後の生活」中の思想に於ける白日見の曙光より以前であつたならば、予はかの時期を耐ゆることが出來なかつたであらう。」

五　結論

以上フェヒネルが死後の生活說と關係ある彼が哲學の大畧である。以て彼が「死後の生活」の思想が孤立した架空の說で

なくして、彼が哲學の大系統の一部分、否な重要なる一部分、寧ろ結果であるといふことが分らう。又た「死後の生活」の考が充分に且つ深く解せらるゝであらう。然し以上の説明は、同時に彼が哲學の綱要、其根本思想を叙したものであつて、之を以て大略彼が哲學を窺ふことが出來やうと思ふ。猶ほ彼が哲學の傾向性質に關して少しく附記して置かう。彼が思想の了解評價に稗益する所があらうと思ふ。

ナンナ及びッェンドアフスタ等フェヒネルが哲學上の著述が現はれた時、世間は之に對して冷淡であり、且つ彼が説を解するもの丶少なかつたことは、前に彼が傳記の所に述べた通りである。世或はフェヒネルを以て空想家と爲した。フェヒネルは此空想家なる名を甚だしく嫌つて居た。彼は以爲らく、天上或は地上に於ける、現象界の確實なる法則に反する事柄、經驗全體に毫も基礎理由を發見する能はざる事柄を以て實際とする人こそ眞に空想家である。例へば輪廻の説の如き、或は、人の靈魂は太陽或は他の遊星或は他の遠隔の世界に、死後引續き生活するといふが如きは、空想である。又た現世と來世との間に何等の媒介關係を認めざる普通行はれて居る宗教的世界觀も空想的である。然し予が説に於ては、其中確たる事實に矛盾する一點でもあるか。誰人も之を發見することが出來ぬであらう。却て予が説ぐ所は、實際の自然、實際の生活の觀察より來たのであると。かくフェヒネルは空想の名を忌んで

居る。彼の哲學は固より想像に充滿て居るけれども、事實を顧みない、事實を勝手に左右する想像が、其力を逞うして居るのではない。彼が說く所は何れもあり得べきもの、考へられ得べきものばかりである。然し此以上の事は爲ない。フェヒネルは以爲らく、一般に信仰なるものは、知識と全く別物ではない、信仰は、知識の中に立入り、知識の構成要素を結合し之を完成するに缺ぐべからざるものである。例へば他人も自分の持て居る如き意識を有して居ると假定すること、或は宇宙の非常な遠方に於ても、非常なる未來時に於ても因果律は吾人が周圍の世界に於けるが如く有効であらうと假定する等は、知識には缺くべからざる假定ではあるが、矢張信仰の一事に過ぎない。又た物質や勢力に關する假定、自然界や精神界を支配する一般の法則の假定等も、矢張一種の信仰個條である。是等は寧ろ人が之に慣れて居て確實であると思うて居るのである。然しフェヒネルは他方に於て純粹の知識と純粹の信仰とを嚴密に區別し、信仰の內容が、單に傳來であるからとて、或は廣く行はれて居るからとて、直に之を以て眞即ち知識としてはならぬとして居る。信仰は知識を完成するに必要缺ぐべからざるものであるけれども、此完成の行り方如何が、信仰の正否如何の標準となるとして居る。此標準より見て、科學者の唱へる世界觀の信仰は正當でなくして、之と正反對に立てる彼自身の世界觀が充分に正當なる信仰であると確信して居た。この

俗見と反對の自覺、自說が人に福祉を與ふるものなりとの確信が、實にフェヒネルが哲學の興味ある所である。彼の見に從へば、哲學は知識の事に非ずして信仰の事である。世界觀は數學の定理の如く證明することも出來なければ、自然科學を觀察する如く實驗的に證明することも出來ない。フェヒネルより見れば、哲學は宗教と姉妹である、同時に哲學は宗教と科學との中間に立ち、一方には科學の結果と一致戻らざる世界觀を立て、他方には宗教心に滿足を與へ、以て兩者の融和を計るものである。故にフェヒネルは、理論を以て人を說服するのみならず、預言者的精神を以て人類の謬見を除き、之をして彼に啓示された神や世界の知識より生ずる幸福を頒たしめんと

するのである。

最後に、フェヒネルが精神物理學は今日の實驗心理學の基礎を與へ、又た彼が美學は亦た今日の心理的美學の基礎を据えたものであつて、其に學術界に於ける彼が大功績であると、既に彼が傳記の中に述べた通りである。故に此兩者の大略を述べたく思うけれども、此附錄の目的が彼が死後の生活說の充分の了解であつて、此目的は上述彼が哲學の畧述にて達せらるゝであらうと思ふから、之は畧することゝする。只だ予は彼が精神物理學に關して一言附加して置かう。是れ精神物理學は、フェヒネルより見れば、彼が哲學の附屬であつたからである。

精神物理學は前に述べた如く精神の現象を物理的に測定せんとする彼が創始した新科學であつて、實に今日の精神的實驗科學の基礎を爲したものである。從て其方式何處までも嚴密科學の方式である。之を神祕的接神的詩的の彼が哲學を網羅せるツェンドアフェスタに比すれば、實に一見雲泥の差がある。前者は實に第一流の嚴密科學の精神の人が老熟なる自然科學者及び熟達せる數學者が有する周密を以て、新しき學術界を秩序的に開拓したものであるとしか思へない。之をツェンドアフェスタの詩的夢想的なるが如くに比すれば、到底同一の人が兩者を作つたものとは思はれない。又た兩者に如何樣なる交渉關係があるとも思へない。然るにツェンドアフェスタの全體を讀み、精神物理學の末章を讀んだものは、此兩者が其根本、其目的に於て同一であるを見て、驚嘆を禁ずること能はぬであらう。精神物理學は、ツェンドアフェスタの世界觀を、該觀が假定した物心兩界の關係よりして、嚴密に科學的に立し、以て、せめては經驗の範圍內に於てだに、信仰を化して知識となさんとした廣大深遠の企圖に外ならぬのである。精神物理學は只だ此企圖に止らず、此學が究めんとする身體と精神との關係は、神と宇宙との大なる關係に歸入するものであるから、從て此兩關係の說に就ては、精神物理學の說は、正にツェンドアフェスタの世界觀に一致して居る。吾人此兩者を熟讀すればするほど、兩者が其根本に於て同一內容を有す

るとが明瞭となつて來る。只だ其内容の各部分が、色々異つて排列せられ論ぜられてあるばかりである。實にッェンドアフェスタの有らゆる重要なる思想は、精神物理學に再現して居る。而して又た反對に精神物理學の根本思想は、ッェンドアフェスタに發見することが出來る。（ヴント、フェヒネル講演四十三及び四頁）

明治四十三年九月一日印刷
明治四十三年九月七日發行

【定價金五十錢】

譯者　平田元吉

發行者　高島大圓　東京市小石川區原町六番地

印刷者　佐久間衡治　東京市京橋區西紺屋町廿七番地

印刷所　株式會社秀英舍　東京市京橋區西紺屋町廿七番地

不許複製

發行所　東京市小石川區原町六番地　振替口座東京一五六八六　電話番町二千六百〇八

丙午出版社

ラーナー、フライト氏原著
東洋大學講師　中島德藏先生述

◎解說批評　倫理學原論

定價金壹五錢　郵稅金八錢

ラーナー、フライト氏の『倫理學原論』は快樂論と觀念論との二大立脚地の調和を試みしものにして理論的に卓拔の見に富みしのみならず又當時社會の實際問題を提へてこれに明快なる解答を與へし一新好著なりこれを以て吾國にても大島學士の譯譯によりて已に紹介せられつゝあり然るに譯文に慣れぬ讀者は往々その眞意を解する能はざるを遺憾とし是が解說を求むるもの少からず仍て一々質疑解答の勞を省かんため各篇各章の順に追うて殆ど各節毎に其の大意を取り最も簡易に明瞭に讀者をして原著者の意を覺はしめむと力め且つ誤過錄の際卑見を以てこれに批評を試みたるものは本書なり　述者敬白

文學博士　松本文三郎先生著

◎宗教と哲學

定價金四十五錢　郵稅金八錢

本書全篇十有餘章まづ眼を宗教と哲學との根本問題に起し宗教と道德研究と信仰等次第に逐うて遂に健全なる宗教の基礎は哲學的論據にあるを闡明す蓋し病弱なる現代思想界は此書に因りて始めて元氣の回復を求め得むなり

東洋大學講師　釋清潔先生譯

◎寒山詩新釋

定價金五十錢　郵稅金八錢

是か佛か是れ仙か是狂漢か得て解すべからざるものは寒山士なり是れ韻語か是れ詩語か是れ佛語か得て解すべからざるものは寒山詩なり宜なり千古の疑團牢固として拔けざることや著者精深雄大の學と才とを以て一筆匂斷彼が面目ここに於てか露出す寒山詩禪を知らんと欲するものは須らく此書を以て指南車となすべし

文學士　渡邊又次郎先生著

◎最新論理學

定價金一圓廿錢　郵稅金拾貳錢

本書は斯學の泰斗たる著者が學界の缺陷を補はん爲めに特に選述せる所に係り所論の明晰にして內容の整頓せる簡潔平易なる叙述の中に學士の卓見を洩したる所他に比を見ざる老熟の大著なり又欄外に重要なる題目を掲げ卷末に英語を對照せる詳細の索引を附したるが如き讀者の便益之に過ぐるものなかるべし

フエヒネル原著　文學士　平田元吉先生譯

◎死後の生活

定價金五十錢　郵稅金八錢

東洋大學講師　境野黃洋先生著

◎補訂 聖德太子傳

定價金五十錢　郵稅金八錢

佛教史家として夙に令名ある境野先生が其の燃犀なる史眼と圓熟せる文才とを傾倒して日本文明の開拓者日本佛教の教主たる聖德太子の事蹟を銀述し併て當時社會の政教習俗の特色を發揮したる名著にして文章の明快論斷の適當實に他に其の匹を見ざる所。

マクス、ミュラー博士原著
佛教大學教授　文學士　清水友次郎先生譯

◎宗教學綱要

定價金壹五錢　郵稅金八錢

清水學士佛教大學に教授として宗教學を講ずるや近代稀有の宗教學者マクス、ミュラー博士の原著を譯本とし隨つて譯し隨つて教ふ今これを補訂潤飾して以て世に公にす蓋し邦文の宗教學書としは唯一無二の良書なり。

月刊雜誌　一部三錢　郵稅五錢　一ヶ年分　郵稅共三十錢

◎聖德

毎月一日に發行する施本川の雜誌であります宗教道德等に關する名家の講演を錄記して掲載致します

假名安くし內容を多くして成るべく多數の讀者を構て諸る文藝修道の實を擧げたいと思ひます

櫻黛飛鳥大學講師
鷲洞宗大學講師　紹滑谷快天先生評譯

◎和漢名士參禪集

定價金壹錢　郵稅金八錢

本書は日本に於ては後醍醐天皇花園天皇龜山天皇の聖帝より北條時賴北條時宗武田信玄上杉謙信前田利家補正成等古今の名臣支那に於ては唐の宣宗皇帝宋の太宗皇帝等の諸帝より黃山谷蘇東坡白樂天張無盡殺休等の碩學が參禪せる佳話を蒐め且つ和漢禪匠に關する逸話美談を合せて之に批評を加へ學道の正路を示し在家參禪の資糧に供する者にして讀者をして坐ながら古今の碩儒碩學と禪を商量し名僧大德の鉗鎚に接するを得しむ。

第三高等學校教授文學士野々村直太郎先生著

◎宗教と倫理

定價金五十錢　郵稅金八錢

正にこれ新宗教論なり新道德論なり而してまた實に人生問題最後の解決書なり世の蠹と肉との禍に惱めるもの知と信との衝突に苦しめるもの若しくは夫の習宗教と舊道德とに厭けるものは速に來つてこゝに無上の安樂地を見出せ。附錄には二宮尊德翁の宗教論を錄す。

初公論社編　○附錄學生錯覺法

◎男女學生氣質

定價金二十錢　郵稅金二錢

此書は坪內雄藏、棚橋絢子、幸田露伴、村上專精、三輪田眞佐子、佐治實然、山脇ふさ子、奧村五百子、嶋山春子、本多庸一、南條文雄、小杉天外、山縣悌三郎、前田繁雲、井上圓了、島田三郎、松村介石、磯邊彌一郎、戶川殘花、鈴木券太郎、石黑忠悳、選塚麗水、中川嶽次郎、南岩倉具威、棚橋一郎、寺田勇吉、ブオスター、坂本盛德、加納久宜、古川流泉、田中治六、加藤咄堂、境野黃洋、中島德藏、下田次郎等の大家が現代男女學生の長短兩方面を觀察しその長所を助けその短所を補ふべき方法を示されたるものなり

文學博士　村上專精先生著
改訂增補

◎自信錄

定價金六十錢　郵稅金八錢

これ博士の新著にして又實に博士が信仰の告白なり百々己の實驗を語り句々心の奧底を披瀝すまづ誰を「人生の目的」に起して「目的の成否」を明にし「實在と我れ」「佛陀と我れ」の關係より「自力と他力」の異同に及びて之を結ぶ凡章廿七節說いて至らざるなく述べて盡さざるなし進歩せる佛教學者の見解は此の書によつて窺ふべく敬虔なる佛教信者の態度は此書によつて知るを得べし

文學博士　村上專精先生著

◎誠のしるべ

定價金四拾錢　郵稅金八錢

誠は實に人生の基礎をなすものにして政治も實業も宗教も道德も教育も凡て此の根底の上に立たざるべからず今や村上先生古今東西の事例を引いてその然る所以を詳說せらる苟も誠を體得して眞のゝたらんと欲するものは此書を讀め

文學博士　村上專精先生著

◎女性訓

定價金四拾錢　郵稅金六錢

本書の內容は天職中府貞淑護師操の五訓を以て女子座右の箴言となすにあり多年女子教育に經驗を重ねたる村上博士はよく女性の缺點を攬み來りて之を訓誡すその親切實に至れり盡せり凡そ世の淑女たらむと欲する者は必ず其の座右を離すべからざる珍書なり

文學博士　村上專精先生編

◎科註原人論

定價金十二錢　郵稅金二錢

◎科註大乘起信論

定價金十六錢　郵稅金二錢

右の二書は共に鉛記書入れ等に便せんがため本文の上下に空白を存し置きたれば學校の教科書學會の讀本として最も適當なり

巌岩周六先生講演

◎人生問題

定價金五十錢 郵稅金八錢

人生とは何ぞや是れ千古の疑問なり曾人之を說き頑學之を論じて而して懷疑の無益々密に苦悶の人愈々多からむとす然るに現代思想界の泰斗黑岩先生自ら人生問題に逢着して疑問の源泉を探り大に其深趣を得て甚に此書あり敍る所神の有無に始まり人生の悲觀樂觀に終る眞に天籟の妙音なり世の悶ある人疑ある人速に來つて此福音に接せよ應幾くは平穩と滿足と活力とを得て溫く且つ光ある人生に觸着することゝ得ん

東京帝國大學講師 文學士 常盤大定先生著

◎釋迦牟尼傳

定價金七十錢 郵稅金八錢

佛傳の大部を占むるものは神秘なる傳說なり世人或は直にこれを抹殺して顧みざるべしと雖も是等の傳說が古來深く佛徒の頭腦を支配せるより見ればその裏に何等かの意義を有せざるはなかるべし此著は主として是等の傳說の起源を尋れ意義を究め南北兩傳大小兩系の相違を比較對照し以て此の千古の大聖釋迦牟尼佛の眞面目を傳へむとするに在り著者常盤大定先生夙に篤學能文を以て聞え殊に佛傳の研究に從ふものこゝに幸あり此著の價値豈し推知し得むか

權惠勝先生著

◎淨土教發達史論

定價金六十錢 郵稅金六錢

精確なる史料により明透なる識見を以て前人の等閑に附したる印度に於ける淨土敎の淵源を究尋して東漸以來こゝに二千歲の間誤傳せし歷史の謬見を破し佛敎歷史の眞相を顯彰し大乘非佛說問題に鐵案を下したる空前の研究なり餘佛敎これにより粉碎せられ眞佛敎これにより顯如たらん薦佛敎これにより假面を剝がれ新佛敎これにより光輝を放たむ請ふ精讀を賜へ

前外務大臣 伯爵 林董先生著譯

◎修養の模範

定價金七拾錢 郵稅金八錢

家庭では父母が子供にする話の種に困り學校では敎師が生徒にする話材の陳腐なのに窮し寺院や敎會では辯士が引用する美談の乏しいのに弱り而して青年は讀んで自修の資とするに足る種の書籍の少ないのを歎いて居る著者これを憂へ書を讀む毎に精神修養の模範とするに足るやうな美談逸話を飜譯摘錄して遂にこの書を成すに至つたのである鄙社今こゝに世の宗敎家敎育家及び父兄青年諸君の前に此の書の發行を報告することゝなつたのは實に無上の光榮である

文學博士 三宅雄二郎先生著

◎小泡十種

定價金四十五錢 郵稅金八錢

博士の學殖富贍に博士の見識卓越に博士の文章超凡なると世既に定評あり今此學と識と文と倒して此著を作す政治を論じ宗敎を說き文學を語り人物を評す其の筆の向ふところ流れては紛紛限りなき澹渺盡きざる大河となり散じては飄飄限りなき飛沫となる小泡か激湍か盡し近代稀有の快著也

實洞宗大學講師 忽滑谷快天先生著

◎達磨と陽明

定價金七十五錢 郵稅金八錢

本書は王禪二學か比較對論して禪學の精髓を發揮すると同時に王學の眼目を豁開して餘蘊なく道德の工夫修養の方法爲學の用心精神鍊磨人格養成等一切として備はらざるなし眞にこれ精神界の指南針にして亦實踐道德の指導者たり

文學博士 井上圓了先生著

◎西航日錄

定價金三十錢 郵稅金四錢

是れ井上博士の洋行土產也歐米に於ける敎育宗敎文學政治經濟等の現況は博士が周到なる觀察と輕妙なる文辭とによりて此に躍動す征露の戰爭に於て武名を世界に輝したる日本の國民は又世界の大勢に通ぜざるべからず請ふ一本を購へ

前文部次官 澤柳政太郎先生著

◎退耕錄

正價金壹圓 郵稅金八錢

著者の序文に曰く「官遊十數年其間人よりも多く云ひ多く論じたるも尙ほ腹ふくるゝ心地を忍んで首はざりし者多し」と知るべし本書は先生が實歷上百般の問題に逢着して滿腹の所感を披瀝したるものなるとを諷刺あり敎訓あり感慨あり痛罵あり氣焰あり理窟あり警拔にして透徹せる觀察あり大膽にして穩健なる斷案あり言はんと欲する所は百ひ盡くして毫も時勢に阿らず誠に憂國警世の大文字なり經世家敎育家宗敎家及び現代の青年諸君は須く一讀せざるべからず

スタンフオルド大學總長ジヨルダン博士原著
マスター、オブ、アーツ中村平先生譯

◎人物の修養

定價金五十錢 郵稅金八錢

澤柳前文部次官特に長文の序を草す其の一節に曰く「ジヨルダン博士は當今世界有數の學者にして北米第一流の人物なり且外國人中最も深厚なる同情を我日本及日本人に寄せらるる紳士なり我國人がその所說その意見を知らむと欲するの情並に之を知ることに依て利すること尠からざるは言を待たず……我日本人は本書に對し尊敬と同情を表し以て博士に報ゆるところあらんことを希望す」と

勝利度、伸近邇平郎先生著

◎社會主義綱要

定價金四十錢 郵稅金八錢

近時社會主義の理論及運動は頗る世人の注意を惹くに足るものありと雖も未だ其學説の概略をも窺ふことなくして徒らに附和雷同するもの或は輕々之を攻擊するもの頗る多く殊に多少の教育ある人士にして社會主義に對して評論を試むる者の如き其無知實に驚くべきものあり然るに此等人士の一讀すべき邦文の書冊極めて少なく偶々之あるは二三の飜譯と時事に對する社會主義者の評論に過ぎず科學的社會主義の原理各問題の解釋其史的發展及現今の諸潮流に就いて系統的に叙述したるものに至つては絶えて之あることなし著者此缺陷を補はんと欲して筆を執り平易簡明の文を以て深遠なる學理難解なる問題を解釋したる者即ち此書なり特に反對論に對する辯駁と社會主義運動の現狀との二章は斯主義に對して毫も興味を有せざる人と雖も見落すべからざる處なり今や燈下靜思の好季社會各階級の人士に向つて此書を讀む

加藤咄堂先生著

◎宗教的修養

定價金十錢 郵稅金二錢

楚人冠 杉村縱横先生著

◎七花八裂

定價金七十錢 郵稅金八錢

著者曰く此書は著者が名に畏れず權に泣かず半錢の債を負はず半個の寵に庇はれず天上天下一點半靈も他の銀肘威壓を受くることなくして純に我が見得底を披瀝せるもの過去十三年間の遺文悪詩收めて此の一卷の中に在り著者の如く貧乏し著者の如く墮落せんと欲する者は請ふ此書を讀め

ベークマン先生原著
杉村縱横先生譯補

◎改訂增補 强肺術

定價金四十錢 郵稅金四錢

肺病を恐るゝものは讀め肺病に罹れるものは讀め歐米に於ける最新式の體力養成法を讀め此書に六の特色あり

第一、時間を要せざること
第二、費用を要せざること
第三、場所を要せざること
第四、勞力を要せざること
第五、言文一致體なること
第六、總振假名付なること

故に男子は勿論婦人小兒と雖も容易に實行し固して確實に其功を收め得べし

アー、エフ、ステンツラー先生原著
エル、ピッシエル先生增訂
ドクトル、フイロソフイエー荻原雲來先生譯補

◎梵語入門

定價金壹圓 郵稅金八錢

歐亞言語の源泉を窮めんと欲する人は梵語を學ぶべし宗教の千態萬狀を知らんとする人も梵語を學ぶべし東亞文明の根據を探らんとする人も梵語を學ぶべし我邦一部人士の梵語を學ぶ者あるも彼等は或る歐語の梵文典を使用すされど歐語梵文典を用ゐんは第一歐語を學ばざる可からざる不便あり第二價格低廉ならず以上二種の缺點を補ひ梵文典に指を染むるの初歩たらしめむがために創めて本書を公にす自今以後苟も英字毎二十六を識み得る人は僅少なる代價を拂つて悉く梵語を學ぶを得べく梵本を讀むを得べし

高楠順次郎先生序 阿滿得藏先生著

◎悉曇阿彌陀經

定價金壹圓 郵稅金八錢

悉曇阿彌陀經とは古來日本に傳はりたる梵文阿彌陀經即ち極樂莊嚴大乘經なり特に悉曇と冠語せしは新體梵字に簡ぱんが爲めなり梵文に加ふるに漢字讀點字音を附し脚註には馬博士の訂正本との異同をもあげ終りに訂正本辭書齊泰二譯を掲げたり學者此の書に依れば悉曇の一端を窺ふに足らん

獨逸哲學博士ポール、ケーラス先生著
學習院教授 鈴木大拙居士譯

◎阿彌陀佛

定價金廿五錢 郵稅金六錢

阿彌陀佛とは何ぞや是れ佛教の根本問題也ケーラス博士その彩筆を揮ひ殆ど小説的結構を以て通俗に之が解釋を試む宜なりその歐米讀書界に好評喧々たるもや弊社曩に十年博士と居を同じうし最も博士と親善なる大拙居士を煩はして此和譯を得たり豈啻に佛の有無に惑ひ心の不安に悶ゆる人のみこれを讀むべしと言はむや

文學博士 法學博士 男爵 加藤弘之先生著

◎迷想的宇宙觀

定價金壹五錢 郵稅金八錢

曩に『吾國體と基督教』を刊行せし以來其の批評續々として既に數十種に上れり僞て今般その批評に對して更に批評を試み且つ簡單なる二大問題を掲げて讀者に其の解答を乞へり基督教が逆信なりや否や又吾國體に有害なりや否やはその解答の如何によつて解決せらるゝを待べしと信ず大方の君子宜れて批評せらるゝことあらば幸甚

著者敬白

高島米峰先生著

◎一休和尚傳

定價金四十五錢 郵稅金八錢

三宅雪嶺先生序　加藤咄堂　杉村楚人冠二先生跋
結城素明畫伯裝幀並畫　高島米峰著

◎廣長舌

定價金七十錢　郵税金八錢

加藤咄堂先生曰はく「米峰今胸中鬱勃の氣を吐して『廣長舌』一篇を著す其の言ふ所は世事に餘なる學者輩の企て及ばざる所にして其の論ずる所は肉を刺し骨を通して當世人士の肺腑を刻る淘にこれ堂々警世の大文字」と

杉村楚人冠先生曰はく「米峰の文を閱するや一氣呵成にして而かも理路非然たり才華絢爛たり細穿たざるなく微打たずんば已まず米峰の筆を執るや政治に涉り文藝に及ひ宗教に關し教育に係り趣味の腐況に至つては敢や行くさして可ならざるを見ず」と

著者曰はく「褒められて嬉しがる程の初心ならざれどもさりとてこう並へられては聊か氣恥しからざるにもあらずたゞ當世慣用の廣告手段はかくもあるべし」と

◎理想的商業

島田三郎先生序　高島米峰著

定價二十五錢　郵税四錢

商業とは學問物を買ひたいといふ人に賣つて遺ほすといふほどの事なり買ひたいと思ふものに賣らうとするが如きは是れ豈無理ならずや今の商人の氣てこの無理はざるものなきものに於て百弊起る是がお客樣といふ商人も行ふこと無暗に侮蔑せざるも亦寡に是がためしなり返るもの矢鱈に賣ふにこの道なり

人の教へに法あり賣ふに道あり客樣といふものゝ立場を明にし以て賣人を敬ひて商人といふものゝ位置を高めて而して買ふものゝ以て賣へと勧め賣るものにはしこたま賣はうんと買へと告ぐるものは叩ちこの書なり但し讀みたれといふ人に讀んで貰はうがために書いたものにまでもとより讀まうと思はないものにまでも強ひて讀ませやうといふやうなそんな不所存は毛頭これなきものなり

高島米峰著

◎東洋史

學生參考

定價十三錢　郵税一錢

著者曰はく「形に於ては恐らく既刊東洋史中の最も小なるものたるべからむも學生を賣る點に於ては或は最も大なるものあるべきを信じて疑はざるなり」と

發行所　東京小石川原町六番地
振替口座東京一五六八六
電話番町二六〇八
丙午出版社

96
5'31

96
531

96
531

007893-000-5

96-531

死後の生活

フェヒネル／著

M43

AAA-0063